

## 平成26年度第1回千葉市史編さん会議議事録

- 1 日 時：平成26年7月15日（火） 午後1時30分～3時30分
- 2 場 所：郷土博物館 講座室
- 3 出席者：（委員）  
吉田会長、本郷副会長、今井委員、緒志委員、白井委員  
（事務局）  
湯浅郷土博物館館長、田中副館長、芦田主査、土屋主任主事、  
大関（囑託）、笹川（囑託）

### 4 議 題

- (1) 平成26年度事業予定（案）について
- (2) 今後の事業予定（案）について
- (3) その他

### 5 議事の概要

- (1) 平成26年度事業予定（案）について  
平成26年度に予定されている事業について、史料調査・収集・整理事業、『史料編 近現代』関係調査、市史等の刊行事業、編さん普及事業、市史研究事業、市史協力員（ボランティア）の活動の6つの項目に分けて説明し、承認された。
- (2) 今後の事業予定（案）について  
来年度の講座、今後の刊行物について説明し、方向性を確認した。
- (3) その他  
特になし。

### 6 会議経過

午後1時30分、委員5人中5人着席。

湯浅館長より新しい職員の紹介、続いて司会（田中副館長）より資料確認を行った。その後、司会より設置条例第5条第2項の規定により、この会議が成立する旨が告げられ開会。

吉田会長の挨拶に続いて、設置条例第5条第1項の規定により会長が議長となり議事に入った。

#### 議題1 平成26年度事業予定（案）について

平成26年度に予定されている事業について、上記6つの項目に分けて芦田主査が説明。

<質疑応答>

吉田会長：内容が多岐にわたるので、最初に史料調査・収集・整理事業についてご質問・ご意見などがあれば伺いたい。千葉市内の学校関係の史料は調査の対象となったことはあるのか。それとも教育センター等で、継続的な調査をしているのか。

事務局（芦田）：教育センターでは、あくまでも教育史編纂の際に各学校に協力を求め、調査をした。市史としては本町小や検見川小に関しては若干調査に入ったことはあるが、全ての古い学校に調査に行けているわけではない。

吉田会長：教育委員会の方で、学校資料の保存または廃棄などについての指針を提示したことはあるのか。

事務局（湯浅）：現状ではないと思う。以前博物館で「千葉市の教育」という展示を行った際に、地域にある古い学校から資料を借りてきた。その際に資料の保存・管理を継続してほしい旨、それを引き継いで欲しい旨を個別に口頭で伝えている。

本郷副会長：教育センターで教育史を編纂したということだが、事業としてはいつ頃の話か。

事務局（土屋）：平成4年から平成12年間の間にかけて行われた事業である。

本郷副会長：そこで千葉市の教育史的な書籍が発行されたのか。

事務局（芦田）：そうである。

吉田会長：教育センターは何をしているところか。

事務局（芦田）：先生方の研修などを担当している。

事務局（湯浅）：他に教育についての情報・広報活動や、教育相談などを行っている。

吉田会長：そこで教育史編纂時の資料がストックされており、それを借用しているということだが、これについてはまた教育センターへ戻すのか。

事務局（芦田）：基本的には返却する予定である。

白井委員：教育史はできあがった時に各学校に配られた。編纂の時には、個人でお持ちの資料も集めたはずだが、そうした個人的なものは基本的に返却しているはずである。その結果、保管状況が良くなければ、既に失われている可能性も高い。以前に博物館で教育史の展示を行った時にも、個人のもは個人からお借りしていた。これらの保存も考えていく必要がある。

吉田会長：そうした個人的なものは、本来「家」が残した史料の一部だと思うが。

緒志委員：新しく史料収集・整理対象となっている史料群のなかには、寄贈されるものが多いようだが、こうした古文書はどのように保管されているのか。

事務局（芦田）：中性紙の封筒に一点ずつ入れ、それを更に中性紙でできた段ボール箱に入れ、収蔵庫にて保管している。

緒志委員：今後、そうした史料群が増えていくことと思うが、今後収蔵スペースについてはどうなっていくのか。

事務局（芦田）：現在も収蔵庫は許容量いっぱい状態であり、検討課題となっている。

白井委員：学校関係の資料は、その都度増えていく。それを保管するために専門の人員も割けないし、約束事もない。そのため、沿革史などを作る時にも近隣から集めることが多く、資料として残りづらい。

吉田会長：今の学校は、教員が頻繁に変わっているようだ。小学校などは、本来は地域の「センター」であるべきなのに、頻繁に教員が変わってしまう。

白井委員：教員が頻繁に変わることに加え、忙しいので保管にまで手が回らないのが実情である。保管方法は考えていかないといけない。

事務局（湯浅）：学校に残っている史料は、地域の方から教育に役立てたいという考えで学校へ寄贈されたものが多い。また、もとの所蔵者がわからないこともある。これらの理由から、郷土博物館へ寄託あるいは寄贈というのは難しい。以前、教育史の展示をした際に、一部個人からの寄贈を受けたこともある。

吉田会長：課題はいろいろありそうだが、どういった方針を作って対処するのか。

事務局（湯浅）：各学校の校長が集まる機会等で、場合によっては文書による連絡事項になるが、史料の保管や引継ぎについて説明することも検討したい。

吉田会長：こういった教育関係の史料収集や、学校での保管について、本来は教育センターが中心となって積極的に行うべきかとも思う。

吉田会長：佐倉市史編さん室所蔵の篠丸頼彦氏収集資料調査についての説明があった。これについて、ピックアップは済んでいるとのことだが、具体的にはどうやって行ったのか。

事務局（芦田）：現在の千葉市域に関連する資料について、数年前に原本を見せていただき、ピックアップが終わっている。

吉田会長：現在の千葉市域の佐倉藩領ということか。佐倉藩本体の史料全体についても考える必要があるのではないか。

事務局（芦田）：支配関係などの全域にかかるものも含めて見ている。

吉田会長：先ほど話が上がった収蔵庫について、このあと実際に見学して状況を見てみてはどうか。

今井委員：郷土博物館への連絡あるいは持ち込み以外に、近代のもので市史から積極的に史料収集をおこなっているのか。

事務局（芦田）：現状ではこちらから積極的に動くということではできていない。連絡あるいは持ち込みに対応するので手一杯な状態である。

今井委員：昭和の戦前・20年代ぐらいのものは、まだ地域に残っている。商売関係の帳簿類や、戦後まもなくの町内会を經由した配布物や回覧物なども考えられるが、そういったものも収集対象としているのか。近現代の資料収集はどこまでを考えているのか。また、町内会の資料で既に市史で把握している、あるいは郷土博物館に寄託になっているものもあると思うが、こうしたものについてはリストが整備されて、いつでも情報が引き出せるようになっているのか。

事務局（芦田）：横断的な目録については、作成していない。従来通り、台帳上で関連する目録を見ていくしかないのが現状である。昭和20年代の回覧などは貴重だと思うので、まとまって数年間にわたって残っているのであれば、ぜひ収集したい。

今井委員：生浜地域の各町内会で保存し持ち回りしている箱があれば見せてほしいと呼びかけをする予定がある。その調査の下準備として情報を押さえておけたらと思う。

吉田会長：生涯を含めた自主的に動いているグループ、市域内の大学のスタッフや学生との連携については再構築できないのか。市域内の史料調査などについても協力できるのではないか。検討していただきたい。

吉田会長：続いて、近現代関係調査・刊行事業についてはどうか。近現代関係調査については、現状では新聞記事入力ボランティアによる活動を、少しずつ地道に続けているということか。

白井委員：ニューズレターでは、No.10 や 12 のように新聞記事を使った記事を載せている。こうした形で紹介できると、市史編さん事業について一般の方にも知らせていける。ニューズレターはそうした意味で貴重な存在だと思う。今年度刊行予定のNo.13 や 14 でも載せていけるといいのではないか。

吉田会長：他にも調査済の史料群の紹介や、紙上古文書講座のミニチュア版など、現在やっている作業に即した記事を出しアピールしていくことは大事である。

白井委員：それをニューズレターや『千葉いまむかし』、あるいは講座で取り上げ、一般の人たちにアピールしていくことが、当面一番現実的であると思う。また、ボランティアの活動の励みにもなる。

吉田会長：ぜひ検討していただきたい。整理した史料群についても文章にして『千葉いまむかし』に掲載する予定はないのか。

事務局（大関）：現在整理中の三枝家文書は、近現代で重要な史料群なので、何かしら出していけたらと思う。整理作業しているスタッフの間で、三枝家文書についての情報を共有していくことを考えている。

吉田会長：紙上古文書講座を二本ずつにしてみてもどうか。枠組みをきちんと決めて、近代のものも意識的に入れるなどの工夫もできるのではないか。

吉田会長：では、普及事業についてはどうか。

緒志委員：初級古文書講座についてだが、定員 40 人のところ、応募者が 52 人とあるが、定員オーバーの人たちについては足切りしてしまうのか。椅子を並べてでも入れてあげることができないのか。

事務局（湯浅）：以前は 30 人のところを 40 人にまで増やしたところである。現在会議を行っている講座室にて開講しているが、40 人だと収容人数としては限界である。

緒志委員：せっかく関心がある方を、足切りしてしまって受講できないのは残念である。千葉県文書館でも古文書講座を開講しており、全県での募集で 200 人であるが、やはり定員オーバーの状態である。実際に受講してみると席が空いていることもあるが、定員で切られてしまう。千葉市の方でも、なるべく出席できるように工夫してほしい。

吉田会長：経験上、200 人で古文書の勉強をするのはシビアだし、40 人でも多いくらいだと思う。ただ古文書を読みたい、読めるようになりたいと思っている人は全国的にもたくさんいる。

緒志委員：そうした関心を持っている方を大事にした方がよい。

吉田会長：アンケートにも来年度何回にしたらよいかなどあったが、もっと抜本的に変えていけないものか。文化庁などで自治体向けに、歴史的な事業に対する

助成金がいろいろあるが、これに千葉市はどこかのセクションで応募したりはしているのか。

事務局（湯浅）：埋蔵文化財調査センターでの加曽利貝塚の特別史跡に向けての資料整理は対象になっているはずである。

吉田会長：史料調査で「待ち」の姿勢ではなく、出ていくことが必要であるのと同様に、予算についても、市の予算が厳しければ何か他の算段をしてほしい。

吉田会長：続いて研究事業等についてはどうか。以前から言っているが、いろいろな方からのオーラルについての研究会も起ち上げてみたいと思っている。できれば一度くらいやってみたいと思っている。聞き取りの対象として、まずは野村前副会長はどうか。

緒志委員：聞いてみないとわからないが、大丈夫ではないか。

吉田会長：市史のスタッフとできれば緒志委員は同席のうえ、ご本人のヒストリーやお仕事についてなど、千葉市の状況や市史編さんの状況についても思うところがあると思うのだが、座談会的な感じで一人が中心となってインタビューし、周囲からも質問をしながらすすめていく形で、とりあえず録音しておくというのはどうか。

緒志委員：その場合、集まる人間としてはどういった層を想定しているのか。

吉田会長：基本的には関心のある人間が参加する、オープンな研究会を考えている。ただ、質問者はせいぜい2人くらいがいいのではないか。

緒志委員：話す内容についてはどうか。

吉田会長：ある程度絞ってお話を伺うのがよい。千葉日報時代、であるとか、時代を区切る必要もあるかと思う。そうした面から見た戦後の千葉市と自分との関わりなどが考えられる。

緒志委員：市史編さんにからむ自分史的な話を伺うと考えてよいか。

吉田会長：とりあえずそこからでもいいかと思う。ある程度事前に伺いたい内容について簡単なメモをお渡しする必要はある。また、他の対象者としては、千葉市の幹部だった人や、地域の町内会的な動きの中心にいた人なども考えられる。本当は普通の方も含めているいろいろな方からお話を伺いたい。

緒志委員：野村前副会長については、内容次第だと思う。教育長のOBの方で、吉田会長が仰るようなテーマに沿ってお話できる方はいないのか。

事務局（湯浅）：いるかもしれないが、どの程度の話ができるかはわからない。

吉田会長：市史編さんがらみで今井委員が付き合いのあった方などはどうか。もちろん、今井委員ご自身からお話を伺いたい。

今井委員：教育関係については、教育史編纂がはじまったとき関係するメモなどについて、先生ご自身がいらっしゃるときには出せないというものが多くあった。ご本人が亡くなってしまったりして、処分も含めてどうなっているかわからない。ご自分でやっていたことについて、例えば手帖のメモなどでも向こう何十年は出せないというようなことも多かった。個人的なものであるとか、メモ類は一切処分するという方もいる。近代はこういった点でもなかなか難しい。

吉田会長：三浦前編集委員長はどうか。ともあれ、対象者については検討の余地があるが、できれば年度内に一度でも開催したいと希望している。

吉田会長：続いてボランティアの活動等についてはどうか。古文書ボランティアのところに、午後は勉強会と書いてあるが、実際には何をしているのか。

事務局（芦田）：古文書を実際に素材にして、自主的に古文書の整理に役立つような勉強をし、交代で発表している。

吉田会長：市史のスタッフがチューターとしてついているのか。

事務局（芦田）：整理の方針などについてはこちらから指示をすることはあるが、基本的には自主的におこなっている。

緒志委員：相当古文書が読める人でないとボランティアになるのは難しいのか。

事務局（芦田）：長くやっている方々なので、いきなり混ざるのは難しいかもしれない。

吉田会長：ボランティアの方々をチューターとして、初心者の方に古文書講座を開講してみてもどうか。

本郷副会長：ボランティアの人数について、増やすことはできるのか。中級古文書講座から少しずつあがってくるとか。

事務局（芦田）：現在のボランティアさんたちは、今いるメンバーで進めたいという意向もあり、あえて追加募集はかけていない。もっと増やしたいということがあれば、公募を考えたい。

本郷委員：初級古文書講座の人数も増えているので、講座を終えられた方々についても有効に活用できるようにしたほうがよい。

吉田会長：勉強会に出ているような方は、初心者であれば教えられるのではないか。

白井委員：中級古文書講座を終えた方はどうしているのか。

事務局（芦田）：自分たちで勉強会をしたりして、勉強を続ける方が多い。地域にある古文書サークルや、NHKなどの民間の講座、通信講座などに参加したりしているようである。

吉田会長：他に何かあるか。無ければ議題2に移りたい。

## 議題2 今後の事業予定（案）について

今後の事業予定について、来年度の講座、今後の刊行物の2つに分けて芦田主査が説明。

### <質疑応答>

吉田会長：では、全体について何かご意見があればお願いしたい。来年度の講座については、事前に配付されたアンケートもあるので、それをもとにご意見を頂戴できればと思う。例えばアンケート内に回数の希望を問う項目があったが、これについては意見をいうと検討できるのか。

事務局（湯浅）：今年度、委員の先生方の意見から古文書講座の回数を増やした。そのかわり研究講座の方を減らした状況である。参加者のアンケートや委員の先生方からの意見を聞き、予算の面も含めて、来年度の変更も検討したい。

白井委員：昨年度の受講者が書かれたアンケートでは、古文書講座の回数については「ちょうどよい」が半数である。研究講座については回数の項目がないが、これもアンケート項目に追加してはどうか。市民がどちらの講座を望んでいるのかについても考える材料になるかと思う。また、近世についての講座の要望があったが、今年度は近世の講座がない。全4回では全ての時代を網羅することは不可能なのはわかるが、聴きに来る市民の意見も大事にしながら作ってほしい。

本郷副会長：研究講座を4回に減らした経緯も知っているのですが、また6回に戻すというのは言いづらいところではある。本来古文書講座と研究講座は客層が違うので、どちらかを減らしてどちらかを増やす、という方法はよくないのでは。

吉田会長：予算などの制約を考えずに、一度何をすべきか、何ができるのか理想的な形を考えてみた方がよいと思う。市民の学習意欲は強いし、大事にしないといけない。であるならば、古文書講座についても、講義だけでなくゼミ形式のものを開いて、年間通じて勉強していくというのはどうか。市史として内部のスタッフや研究者も関わりながら、日常的に隔週などで通年開講し一緒に勉強できたらよいのではと思う。毎週のように市民の方達が勉強しに来て、ここが賑わうというようなことができるといいのかと思う。そういった理想をあげたうえで、限られた予算内でできることを考えた方がよい。大人数の講義もいいのだが、常時行われるような少人数の学習の場が確保されるようになるといいと思う。

本郷副会長：千葉市では、生涯学習を実施する場所は別にあるのか。

事務局（芦田）：生涯学習センターがそれにあたると思う。

事務局（湯浅）：あるいは、ことぶき大学校も考えられる。

本郷副会長：そういったところでも歴史や古文書の講座などが開催されているのか。

事務局（湯浅）：古文書についてなど、深い内容のものは無いと思う。歴史関係の講座はあるはずである。

本郷副会長：そうしたところと連携したり、一部こちらに持ってきて講座を運営したりすることはできないのか。他の市民講座と連動して、予算を少し融通するといったことも考えられると思うが。

事務局（湯浅）：ことぶき大学校とのつながりは郷土博物館でも持っている。千葉氏の展示解説ボランティアを希望される、ことぶき大学校の方が見学に来たこともある。そうしたつながりはあるので、先方と相談し検討していきたい。

吉田会長：オーラルヒストリーなども、小講座のようなところでやっていて、オーラルの専門家が指導をしながらいろいろなところに聞きに行く、という活動がよいのではないかと思う。現状、古文書講座と研究講座が柱になってしまっているが、もう少し別の柱も考えられるのではないか。

緒志委員：千葉は、文化などにあまり興味がないのかもしれない。潜在的にはいるのだと思うが、実際に講座に応募してくるほどには環境が整っていないように思う。そういうところから種をまく作業が必要なのではないか。

吉田会長：そうした「種をまく」作業は県や市が大きな責任を持っているはずである。

事務局（湯浅）：来館者との話やアンケートを見ても、千葉市の場合、東京に通勤していた方が退職されて千葉市に越してきて、千葉市の歴史に興味を持たれること

も多い。他の場所での展覧会などで興味を持ち、勉強したいと思う方も多いようだ。これからはそうした方が増えていくので、こちらとしても積極的に声かけをしていきたい。

緒志委員：相給であるという、江戸時代からの積み重ねが郷土の歴史に対する関心を削いでいるようにも思う。千葉市であれば、千葉氏を核にして、地域の関心を掘り起こすような文化的な事業をしていくのがよいのではないか。

吉田会長：郷土の英雄ばかりでないところにも、千葉の人間としてのアイデンティティを持つことができるはずである。千葉にそうした英雄的な存在がないことは、むしろ幸運かもしれない。卑近な例で言えば、薩摩芋であるとか、海岸の埋立であるとか、素材はたくさんあるはずだ。どうしても江戸時代あるいは戦国時代の英雄的なところに目がいってしまうが、それはその地域の歴史の見方をゆがめてしまう恐れがある。

白井委員：そうしたことに気付かせてあげるための講座も必要である。

今井委員：その地域その地域でアプローチの仕方がいろいろあるように思う。会議の場ではどうしても「講座」ということになってしまうが、そこだけが切り口ではない。吉田会長の仰るように、ゼミのようなものがあったらよいかと思う。生浜では、話をしたあとは必ず現地を歩くようにしており、これにより話した内容を卑近に感じてもらうことができる。やり方は工夫次第でできるのではないか。

緒志委員：そうした史跡巡りのようなものがあれば、入りやすいと思う。ただ、ウォーキングに興味のある人と、歴史に興味のある人が一体であると非常にいいのだが。地元の歴史を知ること自体がよいことであるし、体験することにより歴史にふれる機会があるのはよい方法であると思う。

吉田会長：ぜひ検討していただきたい。最後に今後の刊行物について、歴史読本の現状を簡単に報告してほしい。

事務局（大関）：体裁を整えて崙書房に入稿すれば、年内を目途に刊行できるのではないかと考え動いている。

吉田会長：次回の会議までには完成していると思う。他に何かあるか。無ければ議題3に移る。

### 議題3 その他

#### <質疑応答>

吉田会長：議題3はその他とあるが、何かあるか。特に何もなければ、以上をもって、議事を終了する。

田中副館長の進行により、平成26年度第1回千葉市史編さん会議を終了する。  
会議終了後、委員は収蔵庫を見学した。

問い合わせ先 千葉市立郷土博物館市史編さん担当  
TEL 043-222-8231